

千葉県茂原市 藻原寺所蔵

# 山門安置木造釈迦如来立像修復に関する報告

笹岡直美

千葉県藻原寺・木造釈迦如来立像（山門安置）修復前・修復後写真

はじめに

【一】修復資料の概略

【二】修復について

【三】修復によって判明した事柄と考察

【四】日蓮宗寺院に見られる類例

おわりに

資料1 胎内墨書

資料2 胎内納入品①（墨書板）

資料3 胎内納入品②（紙製品）

資料4 台座反古紙

千葉県藻原寺・木造釈迦如来立像(山門安置)  
修復前



修復後



はじめに

本報告は、立正大学仏教文化財修復研究・実習室（以下、実習室）において、平成一九年に完了した修復事業に基づいている。修復の監修を実習室 研究主任・秋田貴廣、修復業務を同室研究員（平成一八から一九年度在籍者）笹岡直美、岡田靖、野坂知世、杉本一成が担当した。本報告内容は平成一九年五月七日発行の「藻原寺所蔵木造釈迦如来立像（山門安置）修復報告書」を編集および追記した。

## 【一】修復資料の概略

一、資料の所有者 千葉県藻原寺 貫主 持田日勇

二、資料について

二一、名称および員数

釈迦如来立像 本躰Ⅱ一軀 台座Ⅱ一基

二二、法量（cm）

### 修復前

総高「頭頂から框底」：一四六・〇

山門安置木造釈迦如来立像修復に関する報告（笹岡）

本躰Ⅱ最大高「頭頂からホゾ底」：二二二・八

像高「頭頂から像底」：一一六・〇

台座Ⅱ最大高「蓮華弁先から框底」：三〇・〇

最大奥「下框右側」：三五・〇

### 修復後

総高「頭頂から框底」：一五三・〇

本躰Ⅱ（修復前とおなじ）

台座Ⅱ最大高「蓮華弁先から框底」：三七・〇

最大奥「下框」：四六・〇

二一三、形状

本躰は、宋風の雰囲気を持つ釈迦如来立像で、袈裟・僧祇支・偏衫（へんさん）・裳（裙）をつける。肉身部と衣部は漆箔、頭部（螺髪）は彩色。唇は彩色、目は玉眼で表現する。面部は面長で、まぶたが少々重い。鼻が長く、口が小さい。耳朵は環状、耳穴が空けられている。肉髻は低く、地髪部が左右に張り出し、うねるように中央が下がる髪際線をもつ。螺髪はひとつひとつが大粒であらわす。右腕を前方に屈臂し手先は胸前の高さで構え、左腕は掌を前方に向けて垂下している。施無畏、与願印。左右指先の爪は長い。体のバランスは約五等身ほどで、背中に量があり、側面から見ると猫背気味に見える。両足重心

だが左腰が若干外へ逃げ、上半身が右方向に抜けるような動きがみられる。衣は全体に厚く表され、やや堅い印象を受ける。

台座は、蓮台・反花・框座で構成される。蓮台は椀状の蓮肉に蓮華を十方五段で打ち付ける。緑色に塗られた蓮肉に白色と薄紅色で塗り分けられた蓮弁で表す。反花は鮮やかな群青色で塗られ、形状は荷葉座で表す。框座は木地で、表面を黒く塗り、変則六角形で表す。

#### 二一四. 品質構造

##### 本躰

- ・木造（檜材か）・寄木造・内刳あり。玉眼嵌入。随所に割矧ぎを用いる。木地に布貼りを施し、全身に漆箔。
- ・螺髪は切付で大粒、ひとつひとつに毛筋模様を刻み、彩色。
- ・頭躰幹部の主幹材は前後二材を組み合わせ、内刳を施す。
- ・衣正面の襟の線に沿って頭胸部を割り矧ぎ、躰幹部との割矧ぎ面を含む頭胸部の内刳全面に、漆による布貼りを施す。
- ・躰幹部の左右に側面材を矧ぎ寄せ。
- ・右袖は垂下部分を一度割り離し、内側を彫る。
- ・躰幹部材と側面材の内刳面には、漆による布貼りがされる。
- ・なお、頭胸部との割矧ぎ面にも漆による布貼りがされる。
- ・躰幹部には左右側面材の他に、いくつかの部材が矧ぎ寄せる。

右腕（前膊半ばから先）から僧祇支垂下部への部材、右袈裟垂下部内側（偏衫）の部材、袈裟下の裳から足への部材。両手先・両足先は別材を矧ぎつける。

##### 台座

木造・彩色。

#### 二一五. 修復前の状況および主な損傷状態

##### 本躰

- ・躰幹部から頭胸部が外れる。
  - ・肉髻朱として八角形の部材（水晶か）がはめ込まれ、形と大きさが像とのバランスにおいて通例と異なっている。
  - ・白毫は欠失。白毫穴には綿のような繊維が詰められていた。
  - ・両手先は各々不適切な方向で接着されていた。第一回目の調査においては、両手先と右下膊材が脱落していた。しかし、本物件の搬出時においては両手先ともに接着されていた（両手先共に指を上にして掌を前にした状態で接着）。
  - ・左手第五指先を欠失。
  - ・本躰から両足先が外れていた。
  - ・蓮肉へ設置する足ホゾに虫喰いが見られた。
- 台座**
- ・本躰に対し不適切なデザインと大きさと、過去の修理時に間に合わせのような形で組上げられたことが推測される。

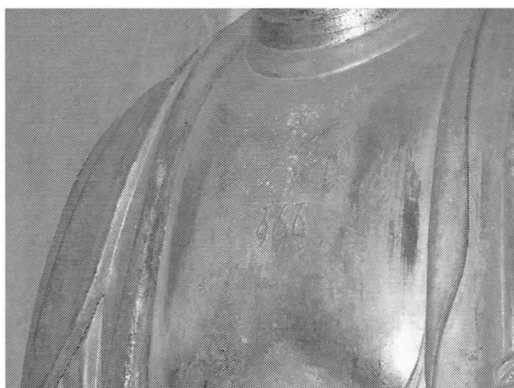
### 三. 特記事項

#### 本躰

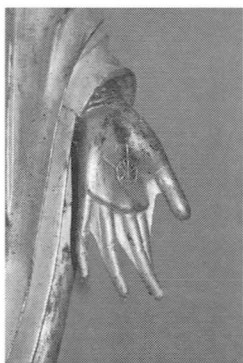
- ・ 胸に梵字のような記号が陽刻されていた。【写真1】
- ・ 両手掌中央に法輪が陰刻されていた。【写真2・3】
- ・ 胎内納入品（墨書が両面に書かれた板・筒状の紙製品）を確認した。
- ・ 胎内の内割全てに漆による布貼りが施されていた。
- ・ 胸部の内割面に墨書を確認した。
- ・ 頭部の内側（内割面）の正中裏（白毫から顎にかけて）縦に蒲鉾状の盛り上がりが確認した。
- ・ 本像は近世（江戸時代初期）の制作であるが、構造と造形表現に鎌倉時代後期に見られる様式（割矧ぎを多用する構造・宋風を感じさせる造形）と多く共通点が認められた。

#### 台座

蓮弁については、当初台座の一部である可能性も考えられるが、反花と框は明らかに後補である。



↑【写真1】



→【写真2】



→【写真3】

## 【二】修復について

## 一、修復設計における諸要件

本像の造形的特徴は、山梨県大野山本遠寺所蔵の木造釈迦如来立像(鎌倉時代作)と多くの共通点が認められる。ただしその類似は、形の輪郭・姿勢・記号的要素など、真似ることが出来る点においてであり、彫刻作品としての造形性そのものは本遠寺像とは異なる。両像の制作年代には開きがあり、本像の胎内墨書に見られる江戸時代前期(正保二年Ⅱ一六四五年)が、制作年代として妥当であることを示している。

本像の木寄せ構造は江戸時代に多い挿首や箱組みではなく、中世に多く見られる割矧ぎを多用した構造で、内刳には全面布貼りを施す大変に丁寧な仕事がなされている。

また、胸に梵字のような三つの記号が陽刻され、両掌には法輪が陰刻される。このような特徴をもつ釈迦像は、現在いくつかの日蓮宗寺院においてわずかに確認されるだけである。

そして、本像には造像の経緯に特殊な事情を推察させる要素が多い。鎌倉期の彫刻を想起させることから、造立時には再現すべき対象として重視されていた像、つまり本遠寺像またはそれに近い造形的特徴を持つ像の存在が背景にあることがうかがえる。

何らかの歴史的経緯とそれにとまなう宗教的必要性から、本像の造立には「復刻」ないし「模刻」が意図されたことは明白である。特殊な造形要素と背景にある特殊な事情は、歴史資料性という点においても本像が非常に貴重な存在であることを示している。

## 二、修復方針

本修復の主な目的は、像の自立安定を図り、礼拝および公開活用に耐える強度的安定状態を復するものとした。

像については、全体の損傷状態から解体は必要ないと判断できたため、足元の強度回復を主眼とした措置を行った。肉髻朱については、形と大きさが通例と異なるが、現状の八角形の加工には何かの意図をもって設置されたと考えられ、本修復においては現状のままとした。

台座については、部材を全解体の上、原則的に現状の部材を使用し、不足な部材を新補して組直すものとした。

その上で、胎内納入品に対する保存措置と像内部の墨書の記録を行うって、資料的情報を保存するとともに、修復過程で得られた情報などを照合・関連づけて本像の由来や経歴をできる限り解明することをめざすものとした。

### 三、主な修復工程

#### 三―一、本躰

##### ①修復前写真撮影

フィルム(35mm)およびデジタルカメラ撮影。

##### ②近接調査

詳細法量および修復前の損傷状態を細微に調査記録。

##### ③納入品の取出しと調査

頭胸部を体部より外すと胎内に二点の納入品を確認した。

納入品Ⅱ紙製品Ⅱ一卷・墨書板Ⅱ一枚

##### ④納入品への措置

紙製品Ⅱ専門家に依頼

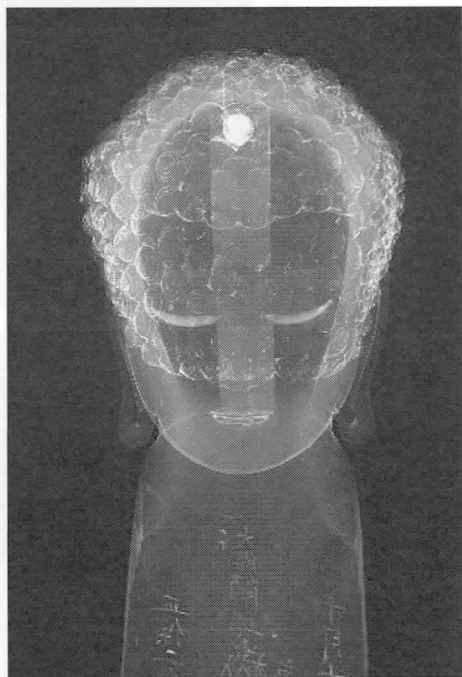
墨書板Ⅱ水およびアルコールを使用してクリーニング

##### ⑤ファイバースコープとX線による頭部の内部調査【写真4】

肉眼で確認できない頭部内を、ファイバースコープで調査したところ、面部の正中裏(白毫からアゴ)に蒲鉾状の盛り上がりを確認した。その部位にも布貼りがなされていた。玉眼を止めるための材ならば、両眼裏に横方向で配されるのが

通例で、この材は縦方向に(上下に長く)設置されていた。さらに詳しい情報を得るため、X線照射による撮影を行った。画像上で材の確認は出来たが、納入品の存在は発見されなかった。ただしX線が透過してしまう素材が封印されている場合はフィルムで確認できない場合がある。

←【写真4】頭胸部のX線写真



##### ⑥部材の新補と設置

左手第五指(檜材)および白毫(水晶)を新補した。

⑦足ホゾの強化

両足のホゾは虫喰いが甚だ著しく、本軀を支える強度が不十分であった。強度回復のため、両足ホゾにアクリル樹脂で木質の含浸補強を行い、虫穴にエポキシ樹脂(以下、エポキシ)をベースとした充填材をつめた。

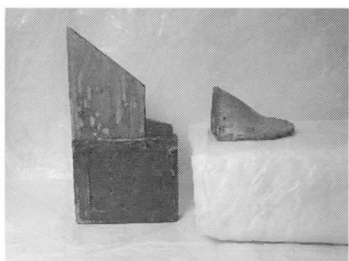
⑧脱落部材の再接合と各所微調整

●両足先と足ホゾ【写真5〜8】

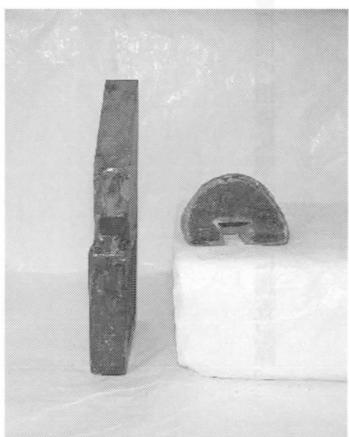
足先とホゾは特徴的な構造であったため、組み上げと本軀への設置を同時に行った。

●両手先【写真9・10】

両手首は近々の修理で不適切な接着をされていた。接着



→【写真5】右足先



→【写真6】蟻ホゾ



→【写真7】足先設置前

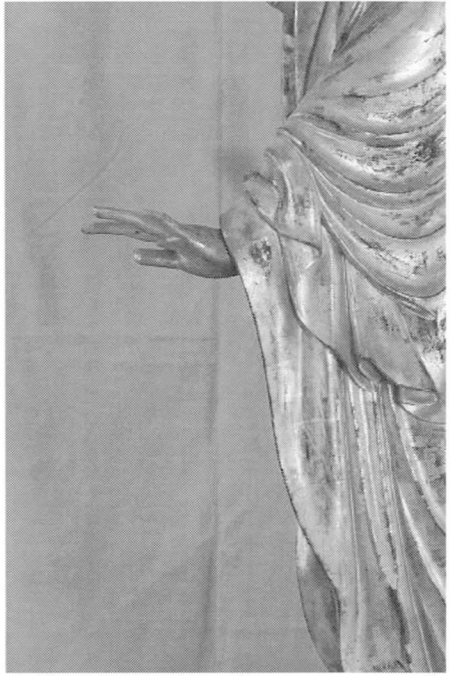


→【写真8】足先設置後

面には、黒い膠と近々に使用されたシアノアクリレート系とみられる接着剤が確認できた。これらを除去してから、左手先と本軀との間に竹製タボを新たに付加し、エポキシを点付け使用で接着した。手首の設置角度決定は、腕からの形の流れを妨げない角度で、矧面同士の設置面が最も広い位置とした。

右手先については、解体によるダメージの回避を優先し、後世の付け直しを採用した。





→【写真9】措置前



→【写真10】措置後

山門安置木造釈迦如来立像修復に関する報告（笹岡）

⑨胎内納入品の再納入【写真11・12】

胎内納入品（紙製品と残片等）と修復によって取り除かれたもの（台座より：後補彩色・心棒・釘など）をそれぞれ和紙に梱包し名称を明記した上で、本修復記録を記した桐箱に納め、墨書板とともに胎内へ納入した。



→【写真11】



→【写真12】

⑩修復後写真撮影（台座共に）

フィルム（中判6×7、35mm）およびデジタルカメラ撮影。

⑪修復報告書作成

三二二、台座



→【写真13】修復前



→【写真14】修復後

①修復前写真撮影【写真13】

フィルム(35mm)およびデジタルカメラ撮影。

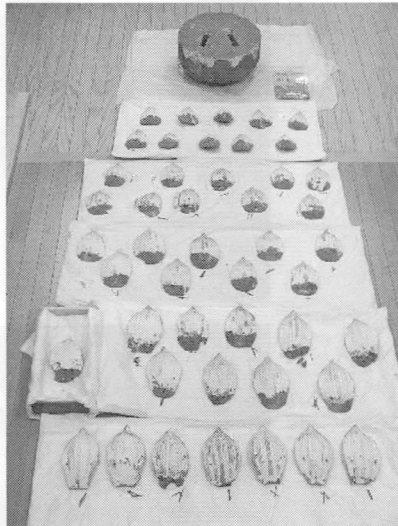
②近接調査

全体に虫喰いと木材の腐朽が甚だしく、本軀を支える強度が不足し、構造的にも不安定であった。

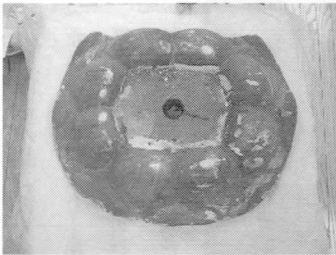
③全解体【写真15〜17】

蓮弁・蓮肉・反花・框・心棒を全解体し、錆びた鉄釘や腐

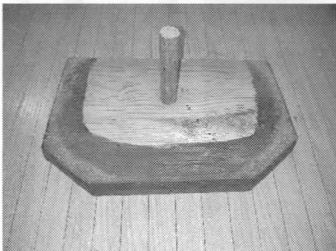
朽した竹釘などをすべて除去した。また、虫喰害と木材の腐朽により矧目が緩んでいたため、各部材を一旦解体しクリーニングを行った。



→【写真15】蓮華解体



→【写真16】反花



→【写真17】框座

④後補彩色の除去と当初漆箔層の剥落止め

彩色は近々の修理による後補と見られ、本鉢とのバランスにおいて不適切だった。虫喰や木材の腐朽を覆い隠すように施され、損傷を進行させる要因となっていたため、彩色をすべて除去した。その下から、当初と見られる漆箔が部分的に発見された。残存面積は非常に少なく、これらに対してはアクリル樹脂にて剥落止め処置を行った。

⑤材質補強

框を除く部材のすべてに虫喰と木材の腐朽がみられた。再使用に必要な強度を補うため、アクリル樹脂による材質補強（樹脂含浸）を行った。樹脂添加による木地の変色を最小限に抑える配慮から低濃度溶液を数回に分けて使用した。ただし連肉材は本鉢を支える強度が必要で、修復後は像容に対して視覚的に影響のない位置に組み上げられることから、必要強度の獲得を最優先し、高濃度溶液の樹脂を使用した。

⑥虫喰箇所 の 充填

虫喰害によって無数の穴が空いた材は、わずかな押圧で形が崩れ落ち、樹脂含浸処置だけでは加重や再取り付けに耐える強度を獲得することができない。そこで穴に充填材を注入

し、取り付けに必要な強度を得るとともに、形状の維持を図った。

⑦形状損害箇所 の 充填整形と補彩【写真18～20】

材質補強と虫喰箇所の充填処置後、形を失っている部分に対し、人工木材で復元的に形を補った。これは形状と強度の両方を回復する効果を得る。新補部分には補彩を行った。



→【写真18】連弁(14)措置前



→【写真19】充填整形



→【写真20】補彩後

⑧台座のデザインおよび設計

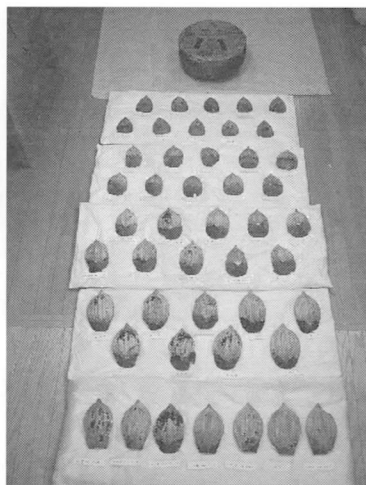
本像は山門上の限られた空間に安置される。最低限の必要様式を踏まえた上で、現状の部材の使用を原則とし、像の安全と設置空間との調和を最優先に、台座のデザインと設計を行った。敷茄子・受座・框座の後半分・隅足・心棒を新たに補うこととした。

⑨台座新補部分の制作と補彩

新補部分を国産檜材にて制作し、補彩を行った。

⑩組上げ【写真21～23】

解体した蓮弁四六枚は元の位置にそのまま戻せるものと、そうでないものがあるため、仮葺きをして角度調整や最終的な位置を決め、他の部材とのバランスを図った。鉄釘は将来的に腐食によって木材を痛める恐れがあるので、取り付けには真鍮釘を使用した。蓮肉と蓮弁の設置面に必要に応じて薄板を差込み【写真22】、蓮弁を葺く角度を調整した【写真23】。



→【写真21】



→【写真22】



→【写真23】

◎蓮弁の配置換えについて

全解体にあたり、すべての蓮弁には符番記録し、組上げるにはできるだけ元の位置に戻すこととした。ただし、明らかに位置が不適切なものは移動し、損傷の度合によって葺く位置を決定した（形の損傷が軽微なものを優先的に正面側へ葺く等）。

⑪各段の組上げおよび本鉢との設置調整

蓮台、敷茄子、受座、反花、隅足を取り付けた框座に新たな心棒を通し、組み上げた。像を仮設置し、その角度や視線を微調整した。框座材自体が大きくゆがんでおり、本鉢を設置すると傾く。そこで八箇所の高さを変え、全体が水平に（視覚的に）設置できるよう調整した。

⑫反故紙の保存

反花材の矧目部分に反故紙が使われており、これらは明治時代の郵便封筒であることが判明した。専門家による処置後に別保存とした。

⑬修復後写真撮影（本鉢共に）【写真14】

フィルム（中判6×7、35mm）およびデジタルカメラ撮影。

⑭修復報告書作成

【三】修復によって判明した事柄と考察

本像は外見の特徴があるとともに、胎内から像に関連する資料の発見もあった。修復を通して判明した事柄とそれに基づいた考察を

記す。

一．胸部の陽刻と両手掌の法輪陰刻【写真1～3・24】

本像には、胸部中央に梵字のような三つの記号の陽刻【写真24】胸の陽刻、左右の掌に法輪の陰刻がなされる。胸部の記号の意味は「出」であり吉祥万徳を表すのではないかと思われるが、その具現化の意図や頒布範囲などはよく分かっていない。このような作例は、日蓮宗寺院においては山梨本遠寺・釈迦如来立像、京都本法寺・釈迦如来坐像などに確認される。本遠寺・釈迦如来立像と本像は外見の特徴が酷似し、その共通点は本遠寺・釈迦像を手本として本像が制作されたのではないかと考えられるほどである。

本遠寺像は文永三年（一二六六年・鎌倉時代／作法橋覚慶）、本像は正保二年（一六四五年・江戸時代／大佛師兵部衛康與作之）が記され、そこには制作年代の開きがあり、本像との関係は現時点においては未解明で今後の調査が待たれる。仮定として、藻原寺にかつて本遠寺像と同



→【写真24】

様の特徴をもつ像が存在し、本像がそれを復元した像と推測するならば、本像がこのような特徴を有することに無理のない説明をすることができる。

## 二、胎内墨書（資料1参照）

胸部内刳に朱漆で制作年代と作者名が記されていた。「正保二年十月吉日」に、京都七条仏所系列の大仏師である兵部衛・康與が造ったと認められている。「兵部衛」は仏師の役職やならかの位を表していると推測する。時代の造形的な特徴と銘の時期が一致しており、本像の制作年代は正保二歳<sub>一六四五</sub>年乙酉と考えて差し支えない。

康與という名は京都七条仏師の系図に見出すことが出来る。

「本朝大佛師正統系圖并末流」<sub>2</sub>によれば、第二一代康正の弟子に康與という名がみえる。初代から三七代およびその傍流を記す系図に康與という名は一人だけである。ただし、康與は京都七条仏師の正統後継者ではないため、生年や没年について記されていない。そこで活動時期を、師匠である康正の没年・元和七年（一六二一年）と、同門で正統後継者である第二二代康猶の没年・寛永九年（一六三二年）に照らして考えてみると、本像に記された正保二年（一六四五年）が制作年もしくは納品年と推測することに問題は無い。

康正については、東寺大仏師職に関する資料の中に見出すことが出来る。資料をまとめた文献<sub>3</sub>によれば、康正は天正五年（一五七七年）に東寺大仏師職に補任、また東寺金堂本尊の薬師三尊像造像の年に息子の康猶が大仏師職に補任されていたことが明らかとなっている。東寺金堂の薬師三尊像は元々延暦一五年（七九六年）に造られたと伝えられ、文明一八年（一四六六年）に焼失するが、その後、慶長七年（一六〇二年）から九年間をかけて再興されたことが明らかで、復興は康正工房による。京都・東寺金堂本尊の薬師三尊像の頭部に納入された木札に康正の銘や、台座に配された十二神将像内部に、康正の弟である康理、康正の息子の康猶・康英（猶子）、その他小仏師の銘が近年の修理によって見出されている。

康與に関する記述は、東寺大仏師職関連の資料や東寺金堂薬師三尊像および十二神将の胎内墨書に見出すことは出来ない。おそらくは康與が東寺造像に関わる立場にすでにいなかった（独立していた）と推測する。

康正工房の作風は、東寺金堂像のなどに見られるように、基本的に鎌倉彫刻の作風を踏襲している。ただし、造形性を鎌倉時代の彫刻作品と比較すると、平板であり形に多少の破綻がみられる。こうした傾向は本像にも見て取ることができ、制作者の康與が康正工房の出身であることを物語っていると考える。

### 三、胎内納入品① 墨書板（資料2参照）

長方形の短辺の一方を三角形にし、そちらを上部として、縦書きの墨書を表裏にあらわす。表面には「南無妙法蓮華経・南無釋迦牟尼佛」と「妙法蓮華経譬喻品第三」の一部が書かれ、裏面には「尊像造立施主」として諸々の情報が記される。

板の裏面には筆跡の異なる二種類の年号（延宝三年乙卯 一六七五年・宝曆五亥歳 一七五五年乙亥）が記される。宝暦年間の記載については胎内に記された年代から一〇年の差があることから、修復時の年号ではないかと推測する。しかし一方の延宝年間の記載は胎内墨書の年号と三〇年の差があり、制作時の納入品であるとは考えにくく、どのような経緯で墨書板が記されたかの詳細は不明である。

また宝暦年間の名前について、「十二月日 善了代」と読むべきか、「十二月 日善了代」と読むべきかが未解明の点として残った。ただし日蓮宗寺院大観によれば、日善という歴代を確認することはできない。

### 四、胎内納入品② 紙巻（資料3参照）

像内部の底より発見された紙製品は、南無釋迦牟尼佛と書かれた包み紙の中に、題目と花押の書かれた和紙、「妙法蓮華経方便品第二・寿量品第十六」が巻いて納められていた。墨書の

末尾に「寛永十九年八月日」 一六四二年と記されており、本像に関連する年号の中ではもっとも古い年代である。胎内墨書の年号の三年前にあたるが、この時期に造立を祈願した、あるいは発注した年と考えることができる。

### 五、台座反故紙（資料4参照）

反花の後補彩色を除去した際、矧目に貼られていた反故紙に文字が確認された。修復により、明治時代の封筒紙と切手であることが判明した。封筒紙には千葉県山武の正法寺住職荒居養寿と記され、この人物は藻原寺歴代七七世と判明した。反花材が転用材だとするならば、その出所を探る手掛かりと考えられる。

### 六、台座

部材を全解体し後補彩色を除去したところ、台座制作当初と思われる泥下地漆箔層が出現した。蓮弁は虫喰害や木材腐朽が進んでいたが、丁寧な彫られ質がよいものであった。反花からは、蓮弁と同じような泥下地漆箔の下地が出現したが、本像の反花とするには大きさやデザインが不適切で、反花というよりはむしろ荷葉で、他像からの転用の可能性が高い。反花の反花の下に設置される黒く着色された厚い一枚板は、本像のため

に用意された框とは言い難く、反花同様に他像からの転用もしくは間に合わせのような形で取り付けられたと推測する。

### 七. 僧形像の存在【写真25・26】

本像を修復するにあたり、藻原寺の山門上に安置されている諸仏の調査を行ったところ、二軀の僧形像を確認することができた。この二軀は老僧【写真25】と若僧【写真26】で、これらには①本像と作風に共通点があること、②三軀共に一見鎌倉時代の彫刻と見えるものの、要素や構造を模倣する近世の作風であるということ、③足ホゾの構造的特徴が同じで、同工房で制作されたと考えられること、等から、元々は三尊形式(釈迦如来・迦葉・阿難)で造立されたのではないかと推察する。

釈迦如来と迦葉・阿難の三尊形式は、中国に多く見られ、鎌倉期には日本でも禅宗系の寺院に取り入れられていた。禅宗寺院の創建当初の本尊が残る例は少ないが、中でも現在、京都・東福寺に安置される三尊は文永年間(一二六四～一二七五年)の像と見られる。

日蓮宗寺院においては、現在の勧請形式(日蓮の宗教世界を表した十界曼荼羅を元に形成する立体曼荼羅世界)のほかに、釈迦如来像を独尊もしくは四菩薩と共に勧請していたのではないかと推測させる資料<sup>1)</sup>については見出すことができるが、迦

葉・阿難を伴う「生身の釈迦」を勧請することを推奨する資料や記録を、現段階では見出すことができない。

本像の胎内より発見された三種類の記録の内、内削の墨書と経巻の年代と木札の年代に約三〇年の開きがあることは、その年月の間に本像と二軀の僧形像一具が他寺よりもたらされた客仏である可能性を示しているのではないだろうか。



→【写真25】老僧像



→【写真26】若僧像



【四】日蓮宗寺院に見られる類例

胸部に特殊な記号を持つ像は、現時点まで日蓮宗寺院にのみ見ることができる。以下に類例を挙げる。

一、山梨・本遠寺 木造釈迦如来立像

文永三年（一二六六年）法橋覚慶作  
像高九七・八 cm

施無畏与願印で両手先掌に法輪の陰刻あり

二、身延町・久遠寺身延文庫 木造如来坐像

江戸時代  
像高五七・〇 cm

両手先は合掌する

三、身延町・松井坊 一塔兩尊（釈迦如来坐像）

寛文八年（一六六八年）ただし明治元年（一八六八年）の修理銘がある。

像高二二・三 cm  
両手で定印をむすぶ

四、京都市・本法寺 木造釈迦如来坐像

鎌倉時代  
像高五二・七 cm

施無畏与願印で両手先掌に法輪あり

五、鴨川市・誕生寺 木造釈迦如来立像

像高五三・八 cm  
施無畏与願印だが両手先掌に法輪は見られない

六、厚木市・妙伝寺 木造釈迦如来立像

江戸時代 丈六像  
施無畏与願印で両手先掌に法輪あり

おわりに

平成一九年に修復の完了した藻原寺所蔵の釈迦如来立像は、現在山門上に千体仏と共に安置されている。この像は、特殊な像容や造形性だけではなく、胎内から発見された様々な資料や、像と同じ安置場所に見出された二軀の僧形像との関わりなど、歴史的に見ても貴重な像である。日蓮宗寺院にのみ確認できる特殊な記号を有するだけでなく、模刻として造立された可能性の高い像が、本山格

の寺院に所蔵される由縁が興味深い。近々の研究で、同様記号を有する像の存在が徐々に明らかになってきている。当研究室でも、引き続き調査研究を進めてゆきたいと考える。

注

[1] 『本朝大佛師正統系圖并末流』(『美術研究第一一号』昭和七年一月)

[2] 根立研介著『日本中世の仏師と社会』(塙書房・平成一八年五月)

[3] 『仏教考古学事典』(編者||坂詰秀一・平成一五年初版)より、  
“万字”の項目(三八五頁)に本像の胸部に見られるような  
記号が記されている。

[4] 『昭和定本日蓮聖人遺文第二卷』(編集||立正大学日蓮教学研究所・平成三年改訂増補第二刷)

参考資料

・『日本の美術507』(執筆編集||浅見龍介・至文堂・平成二〇年八月)

・『日蓮宗寺院大観』(編集||日蓮宗寺院大観編集委員会 昭和五六年一月)

・『平成一六年身延山久遠寺史料調査報告書』(編集||身延町教育委

員会 平成一六年三月)

・『天津小湊の神仏像調査報告書』(編集||天津小湊町 平成一六年四月)

・『大日蓮展』図録(編集||東京国立博物館・平成一五年一月)

・『特別展・鎌倉の日蓮聖人』図録(編集||神奈川県立歴史博物館・平成二二年一〇月)

資料 1 胎内墨書



其中、  
墨書  
胎内



正保二歳  
七条  
大佛師 兵部衛  
康與作之  
十月吉日

資料 2 胎内納入品① (墨書板)

【表】

今此三界皆是我有  
其中衆生悉是吾子

南無妙法蓮華經 南無釋迦牟尼佛

而今此處多諸患難  
唯我一人能爲救護



【裏】

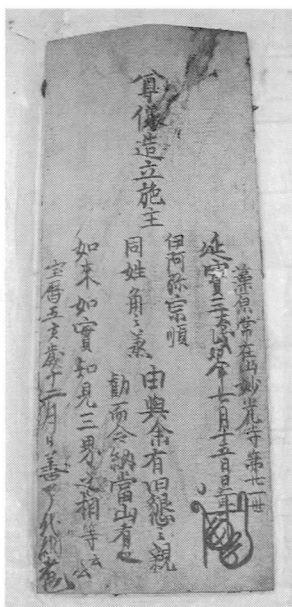
尊像造立施主

藻源常在山妙光寺第廿一世  
延寶三<sup>本才</sup>乙卯年七月十五日日年(花押)  
伊阿弥宗順

同姓角之丞 由與余有旧 懇之親  
勸而令納當山者也

如來如實知見三界之相等 云

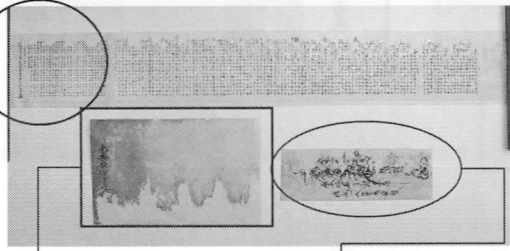
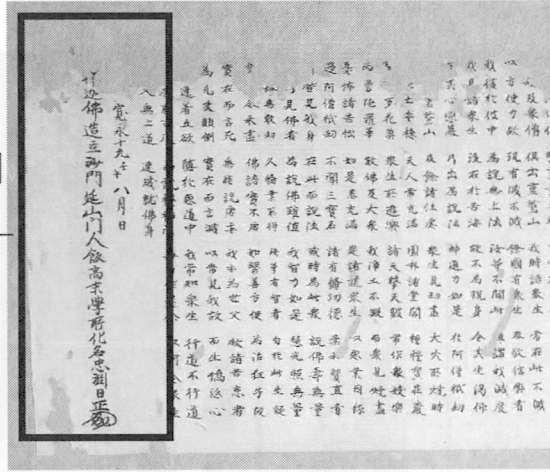
宝曆五亥歲十二月日善了代納者也



資料3 胎内納入品②（紙製品）

釋  
 □ 迦佛造立沙門延山門人飯高末學所化名忠淵日正（花押）

寛永十九年壬午八月日



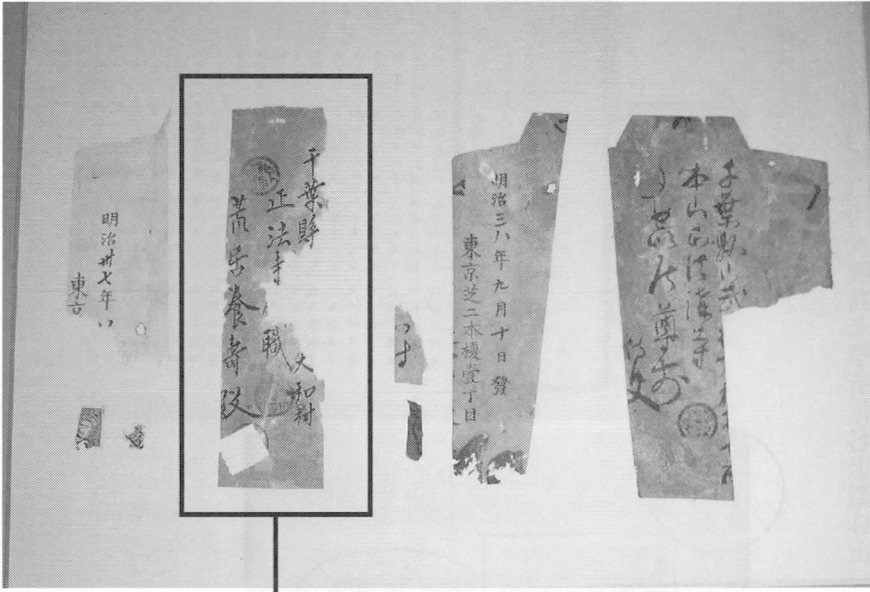
南無妙法蓮華經御開眼經  
 而今此處多諸患難  
 唯我一人能爲救護  
 眞讀  
 日□（花押）  
 今此三界皆是我□（有）  
 （其中衆生悉是吾子）



南無釋迦牟尼佛

山門安置木造釈迦如来立像修復に関する報告（笹岡）

資料 4 台座反古紙



千葉県  
正法寺□職  
荒居養寿殿  
大和村  
(印)

